



初めてのチャレンジ! 今年こそチャレンジ!

2014年度 第5回

学生チャレンジ企画 募集!

福祉・環境、地域活動、ボランティアなど、
学生の取り組みを大学が応援し、サポートする制度です。



- 募集期間: 4月末～6月
- 応募資格: 本学に在籍する学生(大学院生、留学生別科生含む)のグループ
- 奨励金: 30万円を上限として6件程度を予定

※応募方法などの詳細は4月中旬にホームページにて発表します。

主催: 総合企画部 学生生活部

お問い合わせ先

文京キャンパス 広報室

TEL.03-3947-7160

E-Mail: web_pub@ofc.takushoku-u.ac.jp



2013年度 第4回 学生チャレンジ企画 実施報告書



2013年度(第4回)学生チャレンジ企画

実施報告書

学生チャレンジ企画は創立110周年を記念して、2010年にスタートしました。この取り組みは社会貢献、国際交流、大学の活性化などにつながる活動を積極的に行っている学生をサポートするものです。

第4回となる2013年度は、15件の応募があり、書類選考、そしてプレゼンテーション選考の結果、6件の企画が優秀企画に選ばれました。各団体は、実施計画書、中間報告、学チャレ・レポートのホームページ上での公開を通じて、広く学内や学外へ自らの活動を伝えてきました。

この最終報告書は、学生の約1年間にわたる活動の集大成です。

ぜひ、拓大生のチャレンジ精神に触れてみてください。

▶ スケジュール

4/26 (金)	4/30▶6/7 (火) (金)	5/10・14 (金) (火)	6/13 (木)	6/15 (土)	6/19 (水)	7/6 (土)	10/17 (木)	3月
学生 チャレンジ HP 開設	募集期間	説明会	第一次 書類選考 発表	第二次 プレゼン 審査	選考結果 発表	奨励金 授与式	中間報告 発表	最終 報告

▶ 最終実施報告書

15件の応募から6件を採用

企画名	団体名	奨励金	掲載ページ
信州鹿教湯温泉地域の魅力発見ハンドブックのデザイン	工学部デザイン学科 工藤研究室	230,000円	P3~
産学連携による小笠原トマト PR デザインプロジェクト	大学院 デザインチーム	190,000円	P5~
フェアトレードで繋がる世界 ~東日本大震災を越えて~	TVT (Takushoku Volunteer Team)	130,000円	P7~
地域活性化! 高齢者を元気づけよう	国際交流愛好会・北出ゼミナール	150,000円	P9~
文京区民と外国人住民をつなぐ	長尾ゼミナール	120,000円	P11~
岩手県岩泉町 Farm-Stay プロジェクト	グルテンズ (被災地と拓大生を結ぶグルテン)	180,000円	P13~



講評

学生チャレンジ企画を終えて

副学長・学生センター長・商学部教授
学生チャレンジ企画実行委員長

芦田 誠

学生チャレンジ企画は、福祉・環境、地域活動、国際交流、ボランティアなどにおける学生の積極的な活動を奨励し支援するため、2010年拓殖大学創立110周年記念事業の一環としてスタートしました。以後、学生チャレンジ企画は“学チャレ”と呼ばれ、毎年多くの取り組みが行われてきました。

今年度(2013年)も15件の応募があり、書類審査(第1次選考)と第2次選考(6月15日)のプレゼンテーションを経て、最終的に6件のプロジェクトが採択されました。各企画の奨励金は必要経費によって差もありますが、内容的にはいずれも甲乙つけ難く、その成果が期待されるものばかりです。6企画の活動は、2013年9月28日から12月16日までにすべて完了し、その活動状況は10月に中間報告を、2014年1月に最終報告をホームページ上で発表しました。

本報告書は、今年度採択された6企画のPlan・Do・Check・Act、すなわち計画内容、実施スケジュール、成果と反省点、今後の展望を示したものです。まず注目されるのが成果です。大きな成果があったとするグループからやや控えめに自己評価する企画までさまざまですが、6プロジェクトの「魅力発見ハンドブックの制作」、「小笠原トマトのPRデザインの作成」、「南三陸とラオスのフェアトレード」、「高齢者を元

気づけよう」、「祭りを通じた文京区民と外国人の相互理解」、「岩泉町ファームステイと地元住民との交流」の目的は、本報告書の成果発表をみる限り十二分に達成したと判断されます。精力的に活動された学生の皆さん、本当にご苦勞様でした。この体験が必ずや皆さんの将来にとって貴重な財産になっていくものと確信いたします。

いま一つ、メンバーの反省点も注目されます。コミュニケーション・ギャップや専門知識の不足、外国語の能力、練習不足、情報の共有不足、マルチタスクの難しさ、体調管理などの反省点が挙げられています。

「失敗しない者は、つねに何事も成し得ない」と語ったのはアメリカの国際法学者フェルプスです。まずアクションを起こすことが重要で、たとえ結果がパーフェクトでなくとも反省点から学ぶことも多いと考えます。実体験を踏まえ、コミュニケーション能力、チームワークの大切さ、一生懸命取り組むことの重要性を学び、今後の大学における知の練磨や、やがて始まる就職活動に生かしていただければ学チャレの目的は十分果たすことができたと考えます。本企画の経験を今後に生かすことも重要です。

今年度も学生チャレンジ企画を盛会裏に終了することが

できました。これもひとえに学生を積極的に指導して頂いた指導教授の先生方、また企画を受け入れて頂いた行政機関、企業、各種団体のお陰と深く感謝しております。この場を借りまして関係機関に厚く御礼申し上げます。最後に本報告書をご覧いただき、拓殖大学「学生チャレンジ企画」がもつ意義を理解し、次年度へのチャレンジにつなげていただければうれしく思います。





企画名 かけゆ 信州鹿教湯温泉地域の魅力発見ハンドブックのデザイン

団体名 | 工学部デザイン学科 工藤研究室 | 工学部 デザイン学科 4年 代表者 鈴木 なぎさ 他7名

▶ 実施スケジュール

平成25年7月17日～平成26年3月1日

7月17日	企画会議(以後、研究室ゼミ後に実施)	1月上～中旬	現地関係者による内容確認
10月10～13日	現地調査(3泊4日)	2月19日	データ入稿(27日納品)
11月上旬～12月下旬	ハンドブックのデザイン (個人作業および全体調整)	2月28日	鹿教湯温泉交流センターでの成果発表会 (ハンドブック贈呈)

▶ 実施内容

長野県上田市の山あい位置する鹿教湯(かけゆ)は古来の湯治場として知られる小さな温泉町である。高度経済成長期から安定期にかけて慰安旅行の団体客で賑わった時代もあったが、旅行の形態が少人数グループの短期周遊型へ移行すると客数が減少傾向に転じ、近年は少子高齢化と相まって、かつての活気が失われている。

上記の歴史的背景と現状を踏まえ、鹿教湯では2012年度に地域の魅力向上と活性化を目的とした長期的な取り組み「鹿教湯温泉100年ブランド創造プロジェクト」がスタートした。私たちは同プロジェクトを基盤とする「鹿教湯温泉 地域デザイン会議」に工藤准教授が招聘されたことをきっかけとして、長野大学および千葉大学のデザイン学生とともにボランティアとして現地を訪れ、地域の方々と交流を深めながら、住民の意識調査(2012/11/14-16、学生5名参加)に取り組み、年度末の成果発表(2013/3/15-16、学生4名参加)に参加した。

以上の活動を踏まえ、2013年度は拓殖大学の奨励金を得て、デザイン学生ならではの客観性と創造性を踏まえた現地の取材および



現地取材の様子



現地作業の様子

び魅力発見ハンドブックの制作に取り組んだ。制作の目的は鹿教湯のコミュニティデザイン(住民主体の地域活性化活動)の支援である。ハンドブックをとおして地域の方々へ地域の魅力を再認識してもらいたい。

制作にあたり、7月中旬から週1回程度の企画会議をもち、地域理解や参考となるデザイン事例の分析に取り組んだ。10月中旬(2013/10/10-13)には3泊4日の取材旅行に出かけ、3班編成で写真撮影を主とした資料収集や住民へのインタビュー、編集作業に取り組んだ。また、期間中、懇親会や旧温泉宿の清掃ボランティアに参加し、地域の方々との交流を深めた。帰京後、班ごとにハンドブックのデザインに取り組み、それぞれの案を比較検討した結果、以下の2件を実際に印刷することとした。内容については、事前に関係者の方々確認して頂いた。

制作物①「ちいさいかけゆ」
既存の湯巡りスタンプラリーを下敷きに、地域の方々へ鹿教湯温泉の魅力を再確認させることをねらいとした。封筒(長形3号)に入れ、友人知人に気軽に贈ることを想定したサイズ(縦110×横210mm、上下開き、二つ折り・無線綴じ、本文12ページ)である。



ちいさいかけゆ



研究室メンバー(宿泊先にて)



シカメラ

制作物②「シカメラ」
地域名の由来にもとづき、「鹿が案内する鹿目線の鹿教湯」をコンセプトに、地域の方々にとっての日常の風景に新しい視点を提供することをねらった。B6サイズ(縦182×横128mm、左右開き、二つ折り・無線綴じ、本文20ページ)である。

以上2件については、鹿教湯温泉交流センターで開催された成果発表会(2014/2/28)で披露するとともに、各700部を観光協会会長・斉藤宗武氏と上記プロジェクトのリーダー・斉藤明氏へ贈呈した。



観光協会会長へ贈呈

▶ 成果

当初の計画どおり、鹿教湯のコミュニティデザインを支援するハンドブックの制作を完了し、現地に贈呈することができた。自らデザインしたものが実際に印刷され、多くの人の手に渡るという経験は、私たちにとってほとんど初めてのことであり、各々の卒業研究と同様、今後の社会人生活にあたって、大きな自信となるだろう。また、お世

話になった地域の方々との交流もかけがえない財産である。

ハンドブックについては多くの関係者の方々から、そのアイデアと表現について「ユニークな視点に驚いた」、「ワクワクする」等の好評を得ることができた。成果発表会の後、現地の新聞や関係者のSNS等で紹介されたこともあり、鹿教湯の内外から問い合わせ

せがあるとのことで、デザイナーとしては嬉しい限りである。

ハンドブックの利活用については、贈呈先の上記プロジェクトの実行委員会および観光協会に、次代を担う若年層への配布希望を伝え、一任した。今回の活動が少しでも鹿教湯温泉地域の活性化に寄与できれば幸いである。

▶ 反省点・今後の展望

最も苦労したことは卒業研究との両立である。本企画の参加学生は全員4年生のため、各自卒業研究に取り組んでいた。これと並行するかたちで本企画の打ち合わせや編集作業を進めることは、予想を超える労力を必要とした。しかし、振り返ってみれば、本企

画によって得た知識や経験が卒業研究にも大きく役立った。また、SNS等をとおして、現地の方々からさまざまな助言や励ましを頂いたことも心強かった。

取材においては、すでに述べたとおり、地域の方々から有形無形のサポートを頂き、

苦労したことや上手くいかなかったことは、何一つなかった。ここにあらためて御礼申し上げます。

本企画の参加学生は全員卒業となるが、今後はそれぞれ社会人の立場から鹿教湯温泉地域をサポートしていきたい。

▶ 収支報告

支出総額 303,720円			奨励金 230,000円		
内訳					
項目	個数	小計	項目	個数	小計
現地調査(H25/10/10～13)			現地成果発表会(H26/2/28)		
交通費 八王子駅-鹿教湯交流センター			交通費 八王子駅-松本駅	往復×2名	18,000円
チャーターバス往復代		60,000円	宿泊費	2名×1泊	7,000円
高速代		25,520円	ハンドブック制作		
宿泊費	8名×3泊	84,000円	印刷費 「ちいさいかけゆ」	900部	54,200円
			「シカメラ」	900部	55,000円
			合計		303,720円

▶ ホームページ掲載

- 実施計画書 ▶ <http://gakuchalle.jp/kikakushoList.html>
- 10月中間報告 ▶ <http://gakuchalle.jp/centerReport.html>
- 学チャレレポート ▶ http://gakuchalle.jp/gakuchalle_index.html



企画名

産学連携による小笠原トマト PRデザインプロジェクト

団体名 大学院デザインチーム

工学研究科 工業デザイン学専攻
代表者 沈 得正(シム テークチン) 他6名

▶実施スケジュール

平成25年5月15日～11月(納品は2月)

5月15日	作業計画の立案、小笠原の地域や特産物の理解、母島トマトの試食・写真撮影	6月4日	ミーティング
5月20日	小笠原応援団や現地の人との顔合わせ	7月23日～28日	小笠原母島の現地調査
5月21日	ミーティング	9月	デザイン案やPR方法の検討・PR媒体の制作
5月28日	ミーティング、パッションフルーツの写真撮影	10月	仮提案
		11月	デザインの洗練・PR媒体の完成

▶実施内容

5月15日より小笠原母島トマトのPRプロジェクトを開始しました。まず、作業計画の立案、小笠原の地域や特産物の理解を深めるためのミーティングを行いました。その後、6月までは現地から送られてきたトマトやパッションフルーツの写真撮影や試食を行いPRについての理解や知識を深めました。

7月23日～28日の計6日間、小笠原母島へ赴き生産者の方の要望や地域の特性について現地調査を行いました。初日は主に島内の自然環境を紹介していただき、亜熱帯ならではの植物や母島にしか生息しない生き物を見ることができました。二日目はミニトマトやパッションフルーツを生産している農園をまわり、生産方法や販売方法について詳しいお話を伺いました。三日日には懇親会を開いていただき、生産者の方との意見交換でデザインのイメージや販売方法の要望を聞くことができました。また、トマトのPRをするという名目で始まったプロジェクトではありますが、結果的に、ミニトマトとパッションフルーツのPRの要望があり、これらの商品

PRについて検討することが決まりました。

9月上旬よりPR方法とデザイン案についての検討を始め、コンセプトを「太陽の贈りもの」に決定し、また、制作するものをパッケージ・説明カード・ポスターとしました。作業に関してはパッケージ班と説明カード班、ポスター班のそれぞれ3つに別けて作業を行い、成果を一週間に一度プレゼンテーションし、チームで議論してデザイン案の検討を行いました。

10月15日には元東京都職員である渡邊さんを招いて仮提案を行いご意見をいただくことができました。その後、試作品とプレゼンテーションをビデオ録画して小笠原母島へ送り、生産者の方々からも意見や要望をいただきました。それをもとに再度ミーティングを行い、デザインの方向性と今後の予定などをまとめました。

11月はデザインの洗練と写真撮影を現地の方をお願いしました。また、予定では11月に納品でしたが、現地の方の都合により2月に納品することとなりました。



小笠原母島にて、パッションフルーツ栽培の説明を受けた後の集合写真 7/25



小笠原母島にて、現地の人たちとの意見交換の様子 7/26



パッケージ



パンフレット



デザインしたポスター案

▶成果

今回の活動を通じた成果は、小笠原諸島母島で採れるミニトマトとパッションフルーツの、パッケージリニューアル及び宣伝用パンフレット、ポスター制作です。

【パッケージ】

郵送及び店頭販売用のパッケージの改良

○トマト用:小笠原のミニトマトは、飴玉のような甘さと太陽のような赤さが印象的でした。そこで、その魅力を見せる、透明な小分けケースでの少量販売を提案しました。また、これまで使用されていたパッケージの改良案も併せてデザインしました。

○パッションフルーツ用:日照豊かな環境は、酸味の少ない上質なパッションフルーツを育てます。小笠原の環境と高品質さを活かして、

南国風のパッケージと贈答品用にも使用できる、郵送時のカバーをデザインしました。

【パンフレット】

農作物を紹介するパンフレット

○トマト用:小笠原の環境や栽培方法を紹介し、他産地との違いや小笠原の魅力を伝えるパンフレットをデザインしました。

○パッションフルーツ用:知名度の低いパッションフルーツに、慣れ親しんでもらうためのパンフレットを制作しました。小笠原の説明、栽培方法、食べごろ、食べ方、レシピを掲載しました。

【ポスター】

農作物を宣伝するポスター

掲示される場所の特性に合わせて、2サイズのポスターを提案しました。

○店頭用:スペースが限られており、ポスターと接する時間も短いため、A3サイズでパッと見て小笠原と農作物を結びつけることを目的としました。

○船内用:大きな場所で掲示できるため、A1サイズで制作しました。時間のある船内に掲示する為、農作物の紹介を加えたデザインにしました。

今回の活動では、実際のデザイン制作に関する仕事を任せられ、良い経験となりました。初めて経験することも多く戸惑う中、グループのメンバーや協力してくださった先生方と相談し、コンセプト決定やアイデア出しを行いました。デザイン制作の仕方や流れ、実際に印刷、使用する際の注意点などを学べたことが、私たちにとって大きな成果です。

▶反省点・今後の展望

【苦勞したこと】

ポスター、パンフレット、パッケージ制作においてアイデア出しに苦勞しました。生産者側の意見をすべて取り入れると、情報量が多くデザインが悪くなり、取り入れないと要求に答えることができないのでその折り合いをつけることが大変でした。

また、アイデアが決定した後の過程では、3種類の作品を統一のテーマで表現する必要がありました。その際、チーム内でのコミュニケーションがうまくとれず、何度も話し合わなければならませんでした。さらにパッケージは、店舗用、郵送用、お土産用、の3パターンをシリーズ化する必要があり、それぞれ異なった用途でありながら統一感を出すことが求められ苦勞しました。

制作段階では、ポスターを制作するためのソフトに対する知識が不足していたため、学習しながら作業に苦心しました。

さらに、作品のプロトタイプが出来上がり小笠原の方々の意見をもらう際、距離が離れているため直接会うことが出来ず、メールのやり取りとなりうまく連携がとれず意思の疎通に大変苦勞しました。

【うまくいかなかったこと】

第一に、ミニトマトの小分け販売用に円柱ケースのデザインを考えておりましたが、コストが見合わず実現できませんでした。

また、現地での写真撮影が十分できなかったこと、現地調査に行った際のヒアリングで積極的に話をすることができなかったことが心残りです。

さらに、個別作業が多くなってしまい、意見交換や共同作業などチームの良さをあまり活かすことができなかったことが挙げられます。

また、デザイン面でのブランド化手法などの知識不足により、全体を見通したブランド化がうまくできませんでした。

【今後の展望】

今後はチーム内で情報交換をより密におこない、生産者の方々との連絡もより素早く行えるように改善していきたいです。

ポスター、パンフレット、パッケージをブラッシュアップして、小笠原の農作物を日本中にアピールできるようなデザインを考えていきたいです。

▶収支報告

支出総額 390,400円			奨励金 190,000円		
内訳			内訳		
項目	個数	小計	項目	個数	小計
交通費 高尾⇨竹芝駅(JR)	4名	38,560円	宿泊 母島で3泊	4名	60,000円
竹芝⇨父島(おがさわら丸)	4名	180,000円(奨励金)	飲食費(6日間)	4名	40,000円
父島⇨母島(ははじ丸)	4名	46,840円(一部奨励金)	消耗品 プリント用紙、インク	一式	25,000円
			合計		390,400円

▶ホームページ掲載

○実施計画書▶<http://gakuchalle.jp/kikakushoList.html> ○10月中旬報告▶<http://gakuchalle.jp/centerReport.html>

○学チャレレポート▶http://gakuchalle.jp/gakuchalle_index.html



企画名

フェアトレードで繋がる世界 ～東日本大震災を越えて～

団体名 TVT (Takushoku Volunteer Team)

国際学部 国際学科 2年
代表者 齋藤 詩菜 他3名

▶実施スケジュール

平成25年7月11日～平成26年1月22日

7月11日	勉強会	10月18日～20日	紅陵祭での販売
7月18日	打ち合わせ	11月7日	報告会
9月7日～11日	ラオス ホアイフン・タイ村に滞在(生地の買い付け)	11月20日～	HP作成
9月12日	生地を宮城県の南三陸ミシン工房に発送	1月10日	工学部デザイン学科 工藤芳彰教授との打ち合わせ
9月28日	南三陸ミシン工房訪問	1月22日	工学部デザイン学科 学生との打ち合わせ
10月16日	商品完成		

▶実施内容

2013年7月6日に学生チャレンジ授与式があり、翌週の木曜日11日から活動を開始しました。毎週木曜日にTVTの定例会と勉強会が行われているので、それに合わせて毎週木曜日に打ち合わせを行いました。

2013年9月7日から11日まで5日間、TVTのメンバー4名でホアイフン・タイ村に滞在し、縫製品を作るための生地を買い付けをしました。1日目は村を散策しました。2～3日目は布の買い付けを行いました。4日目は近くの川に遊びに行ったり、村で行われていたお祭りに参加して、村の人と一緒に食事したり踊りを楽しみました。5日目はお世話になった家に挨拶にまわり、お昼頃に村を出ました。



9/10 ホアイフン・タイ村で布を選んでいる



出来上がった商品

帰国後すぐに、生地を宮城県の南三陸ミシン工房様に発送し、9月28日に南三陸ミシン工房を訪問しました。スケジュール調整が合わず、南三陸への訪問は1名のみになってしまいました。当時はまだミシン工房がなく、作り手の女性たちは自宅で縫製していました。しかし毎月1～2回集まりがあり、今回はその日に伺いました。集まりでは仕事の振り分けや技術指導が行われていて、私たちが委託したブックカバー制作は初めてだったようで、その日に作り方の講義が行われ、みなさん真剣なまなざしで聞き、メモを取っていました。

南三陸ミシン工房に委託した商品は、10月16日にミシン工房の代表である、熊谷氏が拓殖大学に届けに来て下さり、その際メンバー全員でご挨拶をしました。

商品は10月18日から20日の3日間、紅陵祭で販売しました。文化祭には、南三陸ミシン工房の代表と副代表の方、南三陸ミシン工房に縫製の指導をしている鈴木恵美さんが見

に来て下さいました。

11月7日に活動報告会を行いました。その後、この企画のHPの作成を開始しました。

当初予定していませんでしたが、元青年海外協力隊員の清水理栄さんの協力により、ラオス国内での商品販売が実現しました。

現在は、商品に付けるお品書き作成を、工学部デザイン学科の学生協力のもと進めています。商品販売はショップでの委託販売を中心に行っていくことになったので、今は店頭で商品を置いてくれるお店を探しています。



10/18 紅陵祭



9/10 ホアイフン・タイ村 布の買い付け



9/28 南三陸ミシン工房訪問

▶成果

私たちTVTは、東日本大震災をきっかけに立ち上がった有志団体です。震災後のGWから、現地でヘドロ出しやガレキの撤去を行いました。震災から約3年の間、被災地復興に向け、マンパワーの活動だけでなく、お祭りのお手伝いや傾聴ボランティア、スタディツアーなど様々な形で関わり続け、活動しています。今回のフェアトレード企画もそのうちの1つです。私たち拓殖ボランティアチームの中に「震災・災害」といった言葉が入っていないのは、活動内容を東日本大震災のみにとられない為です。メンバーは約3年間復興活動に取り組み、同時に、常に自分にできることを視野を広く持ち考え、自分自身に問いかけてきました。その結果が今回の企画発案に至ったと思っています。

この企画実行により、私たちは多くのことを学びました。まず、ラオス ホアイフン・タイ村での5日間の滞在では、日頃国際学部の授業で学んでいる途上国を、自身の目で見ることで、現地の人と同じ生活を送ることで何も無い(物で溢れていない)ことが不自由でもあり、また幸せでもあることを知りました。

ホアイフン・タイ村では、布を観光客に対して販売し副収入源になることを望んでいながらも、布の縫製技術はなく布のまま販売しています。観光客は、布のままでは用途が無く買うことはあまりないでしょう。今回作られた商品は、元青年海外協力隊員であった清水理栄さんのご協力により、ラオス国内で販売することもできました。商品として現物を見るのが、布にひと工夫加えるだけで、商品とし

て価値が上がることを布の織り手のカトゥ族の女性たちにも知ってもらえたらと思います。

南三陸ミシン工房の方には、ホアイフン・タイ村の方が織った布を縫製することが楽しいと言っています。単純に、南三陸ミシン工房とホアイフン村の方が給料を貰えるというだけでなく、繋がることのない人々が繋がり、支え合い、充実した気持ちになってもらえることがとても嬉しく感じます。

また、紅陵祭では多くの方が足を止めて、私たちの話を聞いてくださいました。

私たちの活動を通して、南三陸ミシン工房やホアイフン・タイ村について知ってもらえたこと、フェアトレード商品購入という支援を伝えられたことも、大きな成果だと思います。

▶反省点・今後の展望

一番の苦労はやはり、ラオス ホアイフン・タイ村での5日間です。慣れない環境の中、常に人と一緒に生活する息苦しさもありました。食事も苦手なものもありましたし、お風呂は外(何にも囲まれていない所)で体に布を巻き隠しながら、溜めてある雨水を浴びるだけです。現地に行ったメンバー4人は、ボランティアをしているからなのか、元々の性格なのか、普段の生活との違いを楽しんでいましたし、とても現地に馴染んでいました。

5日間の生活の中でも特に苦闘したのは、買い付け時のコミュニケーションです。村には英語を話せる人は1人だけで、その人は

自営業を営んでいるためついてきてもらえません。なので、買い付け時は少しのラオス語とボディランゲージで乗り切るしかありませんでした。こちらも日本で売れる商品を作らなければいけないため、しっかり、ひとつひとつ見て、電卓で値段交渉をして購入していきました。しかし、村の女性たちの必死さも恐ろしいものでした。少しでも多く売り、家計の足しにしたいのです。「私の布を買ってくれ。私の布を買ってくれ。」と売り込みます。その日は1人1人と静かにしっかり交渉するために1軒1軒まわっていたのですが、4軒目には20人ほどの女性たちに囲まれて

いました。あの必死な女性たちの顔を忘れることが出来ません。

品質のためなのですが、購入しない理由を丁寧に伝えたかったのですが、これも少しのラオス語とボディランゲージでしか伝えられなかったのが後悔しています。

今後も、この活動は続けていきます。今年の夏も新しいメンバーと共に、ラオスと南三陸に行き、文化祭での販売を予定しています。販売の場も紅陵祭だけでなく、ショップでの委託販売を計画中です。

現在は、工学部デザイン学科の学生の協力のもと、商品に付けるお品書きを作成中です。

▶収支報告

支出総額 134,373円			奨励金 130,000円		
内訳					
項目	個数	小計	項目	個数	小計
9/7～ ラオス国内での移動費1人1万支給	4名	40,000円	加工費		28,718円
9/7～ ホアイフン・タイ村でのホームステイ・食費		12,480円	紅陵祭費(テント・パネル・写真印刷代など)		17,680円
布買い付け		30,000円	南三陸ミシン工房訪問バス代(東京～仙台)	1名	5,495円
			合計		134,373円

▶ホームページ掲載

- 実施計画書▶ <http://gakuchalle.jp/kikakushoList.html> ○10月中間報告▶ <http://gakuchalle.jp/centerReport.html>
○学チャレレポート▶ http://gakuchalle.jp/gakuchalle_index.html



企画名

地域活性化! 高齢者を元気づけよう

団体名 国際交流愛好会・北出ゼミナール

商学部 国際ビジネス学科 3年
代表者 山岸 大介 他19名

▶実施スケジュール

平成25年7月25日～10月13日

7月25日 合同会議	9月11日 グループ練習(ダンス)	9月25日 全体練習
8月9日 国際交流会議	9月12日 中間リハーサル	9月26日 全体練習
8月22日 グループ練習(レク)	9月20日 グループ練習(音楽)	9月27日 施設打ち合わせ&最終リハーサル
8月30日 合同会議	9月21日 グループ練習(ダンス)	9月28日 本番日
9月6日 グループ練習(音楽)	9月23日 全体練習	9月29日 第一反省会
9月8日 グループ練習(ダンス)	9月24日 全体練習	10月13日 第二反省会

▶実施内容

国際交流愛好会と北出ゼミナールで何か社会的な活動しようと考え、ボランティアなど以前から交流のある“多摩養育園養護老人ホーム楯の里”に協力を願って“多摩養育園養護老人ホーム楯の里”のお年寄りを元気づけ且つ地域交流を図ることを目的に本企画を企画しました。

7月25日、文京キャンパスにて第一回学チャレ合同会議を開きました。会議の内容は国際交流愛好会と北出ゼミ生の顔合わせで、お互いの自己紹介をしました。また、国際交流愛好会と北出ゼミ生の役職を担当しているメンバー紹介。今後の予定などの情報を共有しました。



7/25、文京キャンパスにて、北出ゼミ×国際交流愛好会の合同会議。企画実施に向けて結束

8月9日、第二回学チャレ合同会議を行いました。国際交流愛好会から出し物を提案。提案について問題がないかを北出ゼミ生と一緒に話し合いました。結果、ソーラン節、ちぎり絵、楽器演奏を採用し、行うことになりました。

8月30日、国際交流愛好会の出し物の進捗状況の報告のために第三回の学チャレ合同会議を行いました。進捗状況の報告を終えた後は出し物をするにあたって、準備に必要なものについて検討しました。必要なものは北出ゼミ生が用意することを決め、その他の



9/28、養護老人ホーム楯の里、本番日、留学生による本場の「ベリリダンス」を披露



9/28、養護老人ホーム楯の里、本番日、最後にメンバー全員と施設の職員で集合写真

情報についても意見交換しました。

9月12日中間全体リハーサルを“多摩養育園養護老人ホーム楯の里”で行いました。実際に本番で使うステージでソーラン節、楽器演奏を行いシミュレーションしました。ちぎり絵は実際に作成し、どれくらいの時間がかかるのかを計りました。リハーサルが終わったあとは反省会を行い、良い点と悪い点を話し合い、お互いの意見を出し合いました。出し合った意見をもとに今後の活動を決めました。

9月27日本番前日、最終全体リハーサルは中間リハーサルと同様に出し物の通し練習を行いました。中間全体リハーサルのときに出た課題点をメンバー全員で改善することに取り



9/28、養護老人ホーム楯の里、本番日、「ふるさと」を合唱

組んだため、中間全体リハーサルよりもよいものができました。その後、最後の細かい打ち合わせをし、最終全体リハーサルを終えました。

9月28日、企画日当日。午前中から“多摩養育園養護老人ホーム楯の里”に集合し、午後から行う企画の準備、会場のセッティングを行いました。順調に準備が進み、出し物を一度通すことができる時間を確保することができたため、一度確認練習。本番はリハーサルよりもずっと素晴らしい出し物ができました。施設の職員、老人ホームのお年寄りにもとても喜んでもらい、大成功で幕を閉じることができました。

以上が実施内容です。



9/28、養護老人ホーム楯の里、本番日、メンバー全員と利用者様で「ちぎり絵」

▶成果

今回、実施した企画の成果をそれぞれ報告します。

日本人学生:今回のこの企画に取り組んだことにより、留学生もメンバーにいたため、留学生ととても親密な交流ができました。普段お年寄りと接する機会が少なく、いろいろな話をする中で自分たちが生まれる前の時代の話も聞くことができ、喜んでもらうことももちろん自分達の社会勉強にもなりました。この企画に取り組むことで、一つの企画を真剣に取り組むことの大切さ、チームワークの大切さ、企画をやり遂げたときの達成感と充実感を味わうことができたこと。人と人がつながって

く縁の大切さを学ぶことができたと思います。一番の目的である施設のみなさんに元気を与えることもできました。

留学生:留学生は日本人学生との交流ができたことはもちろん、施設の方々と接することで日本の文化をより深く知ることができたと思います。また、留学生は自分の母国の文化を披露し、伝えることで施設の方々の人たちが外国の文化に初めて触れ、驚いた場面がありました。これはとても素晴らしいことだと思います。留学生は日本の文化と母国の文化の良いところを改めて知ることが

できたのではないかと思います。また、留学生もチームワークで企画に取り組むことで異文化コミュニケーションを通して互いに結ばれた絆というもの実感することができたのではないかと思います。

施設の方:施設の方々は自分たちの出し物で楽しむことができたことと留学生に日本の文化を教えたりすることで、様々な国の留学生とコミュニケーションを通じて楽しい時間を過ごすことができたと思います。また、学生たちと触れ合えたことで元気になってもらえたと思います。

以上が日本人学生、留学生、施設の方の視点に分け、この企画を通じた成果です。

▶反省点・今後の展望

練習不足により、リハーサルでは自分たちのパフォーマンスをしっかりと発揮できていませんでした。これは企画の意図を理解していないメンバーがいたため、練習の大切さを改めて強く伝えなければいけませんでした。これは合同会議を開き、北出ゼミ生と国際交流愛好会で顔を合わせて、企画の意図は何なのかを皆でもう一度話し合いました。何度も討論することでより団結力が高まり、企画に対する熱が一層強くなりました。

二つ目は情報共有です。情報共有がうまくいかないことがたびたびあり、国際交流愛好会と北出ゼミ生の間でも違うことをやって

いる、国際交流愛好会が必要な情報を提供していないこともあり、すれ違う場面がありました。これも会議を開いて、報告、連絡、相談は随時どこにしなければならぬのかを確認し、徹底することで情報共有がスムーズになりました。これにより、トラブルが起きてもすぐに対処できるようになったこと、すれ違うこともなくなりました。これらの点をクリアしたことにより、次第に企画を成功させたいとメンバー全員が考え、自分から目的のために行動するようになりました。

今後の展望はまたこの企画を実施していると考えています。施設の方にとっても喜ん

でもらえたので楯の里の職員の方から、またぜひやってほしいと言われました。

この企画に取り組むことでいろいろなことを学ぶことができました。物事に真剣に取り組むことの大切さ、チームワークの大切さなどといった普段の生活では学べない貴重な経験を積むことができました。また、今回の企画でできた人と人との縁を大切にしたいと私たちは考えています。そのためにも、この企画をよりよいものにして、再度実施しようと思います。

以上が反省点と今後の展望についてです。

▶収支報告

支出総額 150,000円			奨励金 150,000円		
内訳			内訳		
項目	個数	小計	項目	個数	小計
<購入費> インク代		10,132円	<購入費> ふせん		196円
横断幕		6,150円	お菓子(景品用)		3,202円
万国旗		2,625円	画用紙		368円
ハッピ	5着	16,165円	衣装		46,910円
CD	2枚	3,300円	<会議費> 貸会議室①		4,800円
カメラ(チェキ)		16,798円	貸会議室②		1,050円
ちぎり絵材料費		12,915円	<交通費> レンタカー代		15,644円
ポスターカラー		5,000円	ガソリン代		2,645円
楽譜		2,100円			
			合計		150,000円

▶ホームページ掲載

○実施計画書▶ <http://gakuchalle.jp/kikakushoList.html> ○10月中間報告▶ <http://gakuchalle.jp/centerReport.html>

○学チャレレポート▶ http://gakuchalle.jp/gakuchalle_index.html



企画名

文京区民と外国人住民をつなぐ

団体名 長尾ゼミナール

商学部 経営学科 3年
代表者 豊田 武史 他19名

▶実施スケジュール

平成25年6月20日～平成26年2月20日

6月20日	根津で打ち合わせ	10月3日	根津で打ち合わせ	11月22日	根津で報告会打ち合わせ
8月18日	根津で夏季レクチャー	10月12日	根津で打ち合わせ	12月16日	拓殖大学で活動報告会・動画上映会
9月3日	根津で打ち合わせ	10月17日	出演者と事前打ち合わせ	12月22日	根津での地域のイベントに参加
9月9日～16日	根津で外国人参加者集め	10月19日～20日	根津・千駄木下町祭り 動画撮影	2月20日	根津で役員会議でのビデオ上映
10月1日	根津で打ち合わせ	10月28日	根津で祭りの反省会		

▶実施内容

外国人に日本の文化に触れる機会を提供すること、外国人と文京区民の異文化への理解促進。これらの目的を達成するために、「祭り」に外国人に参加してもらうことを考え、私たちは今回の企画に取り組んできました。当初、根津・千駄木下町祭りで神輿を担ぎたい、外国人の方の店を出店したいというお願いをしていますが、根津地域の方と話し合いの結果、残念ながら採用とはなりません。その後何度か企画を練り直し、根津地



10/19 根津・千駄木下町祭りお祭り初日の様子です。初日は天気も晴れたのでお祭りには多くの方がいました。この日は、お祭りのお手伝いを主に行いました。



10/20 根津・千駄木下町祭りの「すいとん」を頂きながら交流している様子です。当日は雨で肌寒い天気だったので体が温まりました。

域の方たちと打ち合わせをしていく中で、「外国人と一緒に祭りの小規模なPVを作ってみない?」という案が出ました。当初とは少し違いますが、これも私たちの目的を達成するチャンスと考え、提案を受け「根津・千駄木下町祭りのPV」を企画しました。

その後は根津地域の方たちと行った数度の打ち合わせを経て、根津地域のさまざまなイベント(子供と交流する夏季レクチャーや餅つき)にも呼んでいただけるようになり、撮影当日のお祭りには温かく迎え入れて頂くことができました。

一方でPVに出演協力して頂く外国人の方々を集めました。街頭で呼びかけやチラシを配ったりしましたが、なかなか思うような成果が生まれませんでした。そこで、文京区にある日本語学校に直接呼びかけを行いました。何校かに連絡をしていると、ある学校が実際にお話を聞いてくれることになりました。撮影当日に参加してくれる人を募ってくれるということになり、撮影に至ることができました。

撮影当日は、あいにくの雨になってしまいましたが、雨の中でできる限り撮影を行いました。協力いただいた外国人の皆さんには、楽し



10/20 撮影で「金太郎」を売っているお店に行きました。外国人の方たちも初めて見る金太郎飴に非常に喜んでもらえました。写真からも楽しんでいる様子が伝わります。



晴れている日のお祭りは太鼓があります。撮影の日は、外国人の方たちに外でやる太鼓を見せてあげることができませんでした。迫力があって見入ってしまいました。

んでいただけ、根津・千駄木の文化についても学んでもらいました。

その後は撮影素材を編集し、拓殖大学に根津地域の方たちをお呼びして、PVの上映会・意見交換会を行いました。今後の活動について、また他に行っている長尾ゼミの活動についてなど、多くのことを根津の地域の方たちに知っていただく機会にもなりました。2月20日にも根津地域での会議でビデオ上映会を行いました。



撮影の最後に、外国人の皆さんにお祭りですべて焼魚やうどんなどを食べて、全員で交流して楽しみました。雨が降った中での撮影でしたが、楽しんでいたのではないかと思います。

▶成果

今回の活動を通して、意見の食い違いや企画が思うように進まなかったことで企画チームが崩壊しそうになってしまったことがありました。しかしそこから、再びみんなで集まり話し合うようになり、諦めず今回の企画を形としてしっかりやり切れたことは、自分たちにとって大きなプラスとなった要素だと思います。

また長尾ゼミが活動できる場が1つ増えたことで自分たちの成長できる機会が増えたことも大きな成果だと思います。

またムービーの撮影に協力いただいた外国人の方には、当日はあいにくの雨になってしまいましたが、お祭りという普段あまり参加することのない日本の文化を実際に肌で体感してもらい、楽しんでいただけたのでよかったです。今回のように小さなことではありますが、このような積み重ねがいずれ大きくなると感じました。今回の撮影したPVをきっかけに、来年再来年と外国人の方がお祭りに参加するようになると私たちは嬉しく思います。

企画作成から撮影の当日まで多くのご指導をしていただき、お世話になった根津地域の方々には、根気強く私たちの活動にお付き合いいただき、感謝申し上げます。今後も根津地域で行われるイベントなどに呼んでいただけるよう今後も積極的に関わっていきたいと思います。今回の活動も今年1年で終わらせるのではなく、来年再来年と継続していくことで根津の地域の方とはより強い信頼関係を築いていけると思います。

▶反省点・今後の展望

今回の企画を実行するにあたり、周りのたくさんの方々に助けていただいたと感じました。企画をすることでは、相手のニーズの把握に苦労しました。企画を何度持って行っても「何がしたいかわからない」「ここはどうなの?」など、私たちの企画の甘さに何度もご指導いただきました。こちらがやりたいことだけを伝えても、相手のニーズを把握して、互いをwin-winの関係になるように企画作りをしなければ成り立ちません。今回の企画を通してそれを学ぶことができました。

その他で苦労したことは、外国人の参加者を集めることです。集めると言っても知り合いがいる訳でもなくどのようにして集めるのか四苦八苦しました。チラシを配ったり、近隣の日本語学校にアポイントを取ったり日本語学校のご協力を得て集めることができました。

しかし一方でうまくいかなかった点はゼミナール内での様々な活動をマルチタスクにこなすことが難しく、今回の企画が後回しになってしまったこともあり、行動・実行が遅れてしまったことです。初動含め活動の遅さは、今後

の活動においても問題になると思うので、今後は気を付けたいと思います。

次回以降は、より多くの外国人に日本について知ってもらいより日本を好きになってもらえるよう外国人の参加者を増やすこと。今回の活動で関わりを持つことができた根津地域の方たちと根津の地域を盛り上げることができるよう、より深い関係性を築くことができるようにさまざまなイベントや活動に参加させていただきたいと考えています。

▶収支報告

支出総額 107,370円			奨励金 120,000円		
内訳					
項目	個数	小計	項目	個数	小計
交通費 夏季レクチャー(茗荷谷駅⇄根津駅)	7名	4,480円	交通費 2/20 根津で役員会議ビデオ上映(茗荷谷駅⇄根津駅)	3名	1,920円
根津地域イベント(茗荷谷駅⇄根津駅)	7名	4,480円	根津へのビデオ確認(茗荷谷駅⇄根津駅)	1名8回	4,960円
6/20 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	4名	2,560円	購入費 印刷用紙		260円
9/3 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	4名	2,560円	DVDR		1,944円
出演者集め(街頭チラシ配り)(茗荷谷駅⇄根津駅)	5名	3,200円	インク		2,980円
10/1 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	2名	1,240円	上映会軽食		1,990円
10/3 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	2名	1,240円	上映会		894円
10/12 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	4名	2,560円	USB		4,010円
10/17 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	3名	1,920円	ビデオカメラ		21,202円
撮影2日間(茗荷谷駅⇄根津駅)	5名	6,400円	バッテリー		7,890円
10/28 祭り反省会(茗荷谷駅⇄根津駅)	5名	3,200円	三脚		2,980円
11/22 根津で打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	3名	1,920円	打合わせ資料コピー代		1,140円
2/20 根津で役員会議ビデオ上映事前打ち合わせ(茗荷谷駅⇄根津駅)	2名	1,240円	謝礼費 動画撮影の際の取材費(出演協力者の食代として)	5名	15,000円
			交通費(茗荷谷駅⇄根津駅)	5名	3,200円

合計 107,370円

※当初の計画と一部変更があり、残金¥12,630は大学に返還。

▶ホームページ掲載

○実施計画書▶ <http://gakuchalle.jp/kikakushoList.html> ○10月中間報告▶ <http://gakuchalle.jp/centerReport.html>○学チャレレポート▶ http://gakuchalle.jp/gakuchalle_index.html



企画名

岩手県岩泉町 Farm-Stayプロジェクト

団体名 グルテنز(被災地と拓大生を結ぶグルテン)

国際学部 国際学科 2年
代表者 森島 あやめ 他7名

▶実施スケジュール

平成24年11月17日～平成25年11月4日

平成24年11月17日	岩手県岩泉町訪問、同町議会議員坂本昇氏と協議	7月中旬	企画最終確認、参加者打ち合わせ(事前研修)
平成25年3月9日	同町農家と「ファームステイプロジェクト」基本合意	7月29日～9月15日	ファームステイプロジェクトの実施
6月14日	同町町長表敬訪問とファームステイ農家訪問	11月1日～3日	坂本氏、ファームステイ農家へ御礼挨拶、評価、反省会
7月2日	坂本町議会議員と打ち合わせ	11月4日	参加者報告会

▶実施内容

平成24年11月17日に私たちは岩手県岩泉町を実際に訪問し、同町議会議員である坂本昇氏と協議をし、今回のファームステイ計画を立案しました。平成25年3月9日再び同町を訪問、同町農家の大まかなピックアップとファームステイの基本的な枠組みの合意。その後数回のメール連絡を経て6月14日、同町の町長へ表敬訪問しました。ファームステイの趣旨などの説明をし、理解をいただきました。同時に農家訪問、趣旨説明をし、快諾をもらいました。7月2日、坂本氏と、参加者の希望農家とのすり合わせなど、具体的な打ち合わせをし、7月中旬にかけて坂本氏との企画の



8/5 岩手県岩泉町にて、佐藤椎菜(一番左)三瓶由香里(左から二番目)、受け入れ農家さんと記念撮影

最終確認をしました。予定では同町を訪問予定でしたが双方の日程が合わず、電話により最終打ち合わせとなりました。その後国際学部棟内にて参加者との事前研修。7月29日よりファームステイプログラムの実施しました。以下、実施期間と参加者氏名、所属学部、学年、体験農家の業種です。

- ◎7/29～8/4 佐藤優介(国際1年) 酪農
- ◎8/2～6 土屋琴美(国際1年)、八町まなみ(国際1年) 畑作
- ◎8/5～11 佐藤椎菜(国際1年)、三瓶由香里(国際1年) わさび
- ◎8/5～11 鈴木詩織(国際1年) 酪農
- ◎8/25～29 中村早穂(国際2年) わさび
- ◎9/3～7 酒井園香(国際2年) 酪農
- ◎9/3～8 西條那奈(国際1年)、小澤波乃(国際1年) わさび
- ◎9/10～15 大谷美優(国際1年) 酪農

酪農では牛舎の掃除、牛の餌やりなど、牛の世話を中心に体験。

わさび農家ではわさびの洗浄、加工、出荷作業を体験。

畑作農家ではピーマンの収穫、量り、袋詰めなどの出荷作業を体験。

ほかにも坂本氏のご厚意で岩手県各所の視察などもさせていただきました。

11月1～3日にかけて再び岩泉訪問、坂本氏とファームステイ農家へ御礼。坂本氏から今回のファームステイプロジェクトの評価をいただき反省会を行いました。11月4日には参加者の報告会と振り返り、評価をもらいました。



8/10 岩手県岩泉町にて、鈴木詩織、牛舎の清掃



9/5 岩手県岩泉町にて、西條那奈(左)小澤波乃(右)、わさびの洗浄作業

▶成果

岩泉町の方に対して

過疎化が進む岩泉町にとって、若い学生がこの町にやってくることで体が珍しく、この町にとっては大変喜ばしいことだそうです。昨年の夏に訪問した第一回ファームステイ企画において岩泉町に住む方々からは、「生きる希望をもらった」という声や、過疎化に伴い厳しい人手不足に悩まされていた農家の方々からは「手伝ってくれて助かった。おかげで出荷に間に合った」という言葉をいただきました。今回の企画で現地と私たちのパイプ役になってくださった坂本氏からは「岩泉を知り、来てくれただけでもありがたい」とおっしゃっていました。微力ではあるかもしれな

いが、目に見える部分ではもちろん、見えない部分でも私たち学生が岩泉の方々の力になれたら、それは成果として実を結んだと思います。

私たち学生に対して

普段土を触らない人や虫が苦手な人、野菜が苦手な人など、今回の参加者の中にはこういった学生がたくさんいました。しかしファームステイに参加し、農家の手伝いや、大自然に囲まれた生活を送っている中で自然と克服して帰ってきた学生が多かったです。参加を終えた学生の話や聞くところの学生も成長して帰ってきたと、岩泉で学び得たことで将来

に大きく役立つことがあったと報告がありました。なかには農家になりたいという学生もいました。朝起きて太陽に感謝したり、畑で汗をかいて食べることに感謝をしたり、夜は満点の星空を見ながら眠りにつく。そういった自然の中の生活は、時に自分自身を大きく成長させるのだと感じさせられ、また、大自然から学ぶ事はまだまだたくさんあると強く確信しました。農業の知識を得て、過疎化の地域の現状を知り、大自然のなかでひと夏を過ごし、自分自身と向き合ったり、将来をみつめたり。私たち学生にとっても良い影響を受けた企画となりました。

▶反省点・今後の展望

今回のファームステイプロジェクトの最大の反省点は、私たち代表が、参加者の体調管理をしっかりできなかったことです。私たち代表が岩手県岩泉町へ訪問したのが冬から春先だったので夏の岩泉の気温を把握することができませんでした。実際は想像と異なり朝と夜が冷えたらしく、参加者にそのことを伝えていなかったため参加者の体調管理がしっかりできませんでした。また、坂本氏との連絡もそこまで及んでいなかったため、参加者には不便をかけてしまいました。

その他にも、坂本氏との間で連絡の行き違いやタイムラグがあり、坂本氏と農家の方との間の連絡も遅くなってしまった。岩手県はすぐに行ける距離ではないので連絡手段が限られてしまっていたこと、顔を合わせて会議をする

ことがあまりできなかったこともあり、プロジェクトを円滑に進めることができませんでした。また、参加者と坂本氏と私たち代表との間でも連絡に行き違いがあり、参加者には不安を残したまま岩泉へ行かせてしまいました。

取決め部分でも不十分な部分があり、宿泊料は払うべきなのか、給料はもらって良いのか、など徹底できていませんでした。

不十分なことが多々あり、参加者には不満もあったと思うにもかかわらず、来年もあつたらまた参加したい。岩泉へまた行きたい。大学では体験できないようなことが体験できました。名残惜しい、などという声が参加者全員から聞かれ、このプロジェクトをやった意味があったと感じました。そもそもこのプロジェクトの目的は、東日本大震災によって若者の過疎が著し

くなった岩手県岩泉町を学生に知ってもらい、実際に足を運び、岩泉を好きになってもらうことと、農業を通じて被災地と拓大生を結び、ファームステイを通じて農家さんには人材と地域活性化を、拓大生には農業知識と技術習得という双方のメリットを目的としていたので、きっかけとしてそれは達成できたと思います。

次回以降の活動については、これらの反省などを含め、取決めなどをしっかりと決め、ファームステイモデルの確立を目指し、安定したプロジェクトの運営とより多くの学生に参加してもらえることを目標とします。また、この岩手県岩泉町のプロジェクトが確立した後には、これを国際学部がある八王子市や北海道短期大学のある深川市へも拡大し、本格的なファームステイの定着を目指します。

▶収支報告

支出総額 544,880円

奨励金 180,000円

内訳

項目	小計
交通費 東京-盛岡	10,000円
盛岡-宮古	3,940円
宮古-小本	15,000円
往復分×12人	347,280円
民泊費、食費 滞在一週間の場合 一食300円×3×7×12	75,600円

項目	小計
謝礼金 一農家 10,000×12	120,000円
広告費 ポスター作成費	1,000円
報告書印刷費	1,000円

合計 544,880円
※奨励金は広告費、交通費、謝礼金にそれぞれ負担

▶ホームページ掲載

○実施計画書 ▶ <http://gakuchalle.jp/kikakushoList.html> ○10月中間報告 ▶ <http://gakuchalle.jp/centerReport.html>

○学チャレレポート ▶ http://gakuchalle.jp/gakuchalle_index.html